

緒言

二〇一一年に生誕五四〇年を迎えるデューラーは、豊かな構想力、清新な現実描写、外部からの刺激を積極的に学んで生かす進取の気性により、ドイツのみならず、近世ヨーロッパ美術の進展に大きな足跡を残した。近現代に至っても、彼の芸術はなお多くの美術家のインスピレーション源となり、また、美術の領域に留まらず、ドイツ文化のシンボルとして、あるいは消費社会のキャラクターとして、時代とともに歩み続けている。

本シンポジウムは、デューラーから広がる創造的受容の世界を、約五〇〇年に亘って概観し、その多様な可能性や、現代までつながる造形および造形思想史のダイナミズムを考える試みである。エビステマーの大きな転換を考慮して、デューラーの同時代から十八世紀までを第一部近世、十八世紀末以降を第二部近現代とする二部構成としている。西洋文明の圧力を受け止めた近代日本を含め、五〇〇年の時空を縦断することで、一粒の麦が多様な糧を生む文化の営みの一端を紐解くことができれば幸甚である。(大原まゆみ)

特集「デューラー受容史五〇〇年」(シンポジウム)は
明治学院大学文学部芸術学科・言語文化研究所・国立西
洋美術館共催のもと行われたシンポジウムの記録である。

日時…二〇一〇年十一月十三日(土)

場所…明治学院大学白金校舎二号館二三〇一番教室